

日本新聞製作技術懇話会
広報委員会編集

編集人 辻 裕史
東京都千代田区内幸町
日本プレスセンタービル
8階 (〒100-0011)
電話 (03) 3503-3829
FAX (03) 3503-3828
<http://www.conpt.jp>

CONPT

CONFERENCE FOR NEWSPAPER
PRODUCTION TECHNIQUE JAPAN

VOL.36 No.3
2012.5.1
(通巻 213 号)

日本新聞製作技術懇話会
会報 (隔月刊)
(禁転載)



Drupa 2012の見どころ

日本新聞協会 技術コンサルタント
三宅 順



世界経済にやや明るさが出てきたとはいえ、欧州経済の状況は依然として厳しい状態が続いている。こうした状況下で、今年のdrupa 2012は5月3日から16日までの14日

間、ドイツ・デュッセルドルフで開催される。業界関係者にとっては最新の技術や新製品について情報収集する最も重要な場である。本稿では今年のdrupaの注目点・見どころを探ってみたい。

■drupa 2012とは

drupa（ドイツ語の印刷と紙の合成語）は世

界最大の「国際総合印刷機材展」で、一般的にはprint media messeといわれる。1951年に第1回目が開催され、今回で15回目となる。デュッセルドルフのMesse Düsseldorfの19ホールを使って開催される。

展示カテゴリーは毎回変わるようだが、今回は①プリプレスとプリメディア②印刷③ポストプレスと紙加工④用紙とサブストレート（被印刷物）⑤インキと消費資材⑥技術要素と基幹技術⑦サービスとソフトウェア⑧その他の8カテゴリーに分類されている。3月末現在で出展社数は50か国以上から1800社を超え、カテゴリー別の集計では合計2600を超える。これは毎年開催される新聞業界向けのWAN-IFRA展をはるかに超える規模だ。

目次

drupa 2012の見どころ	日本新聞協会 技術コンサルタント	三宅 順	2
新局長に就任して	神戸新聞社 情報技術局長	水内 眞	5
楽事万歳	新潟日報社 取締役印刷局長	徳永 伸一	6
	ミュラー・マルティニジャパン(株) 企画室担当課長	古味 宏之	7
会員社リポート	富士薬品工業(株)、三菱重工印刷紙工機械(株)		8
	日本電気(株)、富士フイルムグラフィックシステムズ(株)		9
JANPS準備部会報告			10

●表紙写真提供：表紙写真提供：CONPT TOUR2011 入選作より

東洋インキ(株)・松浦 国治郎氏「ジュリエット像」

●表紙製版：(株)デイリースポーツプレスセンター

●組版・印刷：(株)デイリースポーツプレスセンター



前回 drupa 2008の会場風景

■drupa 2012の出展会場

今年の展示スペースの大きさを見てみると、当然のことだが印刷の展示スペースが最大、続いてプリプレスとプリメディア、ポストプレスと続く。特に、アグファ、キヤノン、コダック、エプソン、富士フイルム、HP、コニカミノルタ、リコー、Screen Europe、ゼロックスなどが出展するデジタルソリューションを提供する企業(プリプレスとプリメディア)に割り当てられた展示面積は前回よりも拡大している。

また、特に、中国からの出展社数が倍々ゲームのように急増していることは注目だ。

■前回までのdrupaの技術トレンド

今回の展示会のトレンドを考える上で、前回の様子を少し振り返ってみよう。

展示カテゴリー（数字は社数）は①プリプレスとプリメディア(440)②印刷機械(894)③製本(565)④用紙加工(578)⑤資材(437)⑥サービス(337)の6分類、合計3251であった。今年の出展社数は前回をやや下まわり、カテゴリー別の出展社数で比べると20%ほど少ないようだ。やはり、ここにも世界的な不況の影響が現れているものと思われる。

過去3回の展示内容の大きな技術的トレンドは、前回までの見学者の報告によると次の通りであった。

①2000年 「ダイレクト・イメージング関連

技術」

②2004年 「CIP4とJDFによるワークフロー統合技術」

③2008年 「インクジェットとオフセット印刷・デジタル印刷の融合」

■特別企画と特別展示

一般展示とは別に会期中に特別企画が行われている。前回、前々回と好評を博した「drupa Innovation park 2012」がホール7で開催される。この企画は9つのテーマパークが設置され、各テーマ自体が最新のトレンドであり、印刷メディア業界とその環境の変化を反映しているという。主なテーマパークは次の通りだ。

①Print Automation Park

（印刷プロセスの最適化、効率化）

②Digital Imaging Park

（デジタル映像ソリューション）

③Print Product Innovation Park

（革新的な印刷製品と技術）

④Printed Electronics/Functional Printing Park（プロセス技術としての印刷を紹介）

⑤Green Printing Park

（持続可能な印刷イノベーション）

以上のほかにも、ホール6では特別展示「Print City」で環境に配慮して印刷効率をどのように高めていくか、ホール9では「Media Mundo」で持続可能性(サステナビリティ)についての展示や発表がある。

■印刷業界の状況

日本の印刷業界も良い状況ではないが、世界的に見ても良いところは極めて少ない。このため、昨今はリストラの嵐が吹き荒れている。例えば、ドイツのマンローランドは破産手続きを開始し、新たな会社として部門分割と人員削減行われる。ハイデルベルグは全世界で約2000人以上の人員削減を発表した。他にも、コダックの破産が伝えられている。

一方で、生き残りをかけた合併や提携、買収も進んでいる。発送設備メーカーのスイスのミューラー・マルティニとイタリアのシトマは協力協定にサインした。たばこ機械や製紙機械、工作機械のメーカーであるドイツのKörberはPaper Systems部門を売却する決定をした。

■今年の見どころ

さてここまで、出展カテゴリー、出展スペース状況、前回までのトレンド、特別企画・特別展示、メーカーの置かれた状況と見てきたわけだが、これらを材料に今年の注目点・見どころを探してみたい。

一つは前回のdrupaや昨年のIFRA Expoで多いに脚光を浴びた「インクジェット印刷」がどのように進展(特に印刷品質、速度、コスト)したかであろう。当然、情報のパーソナライズ化にどのように対応するのかといったソフト面も要注意だ。

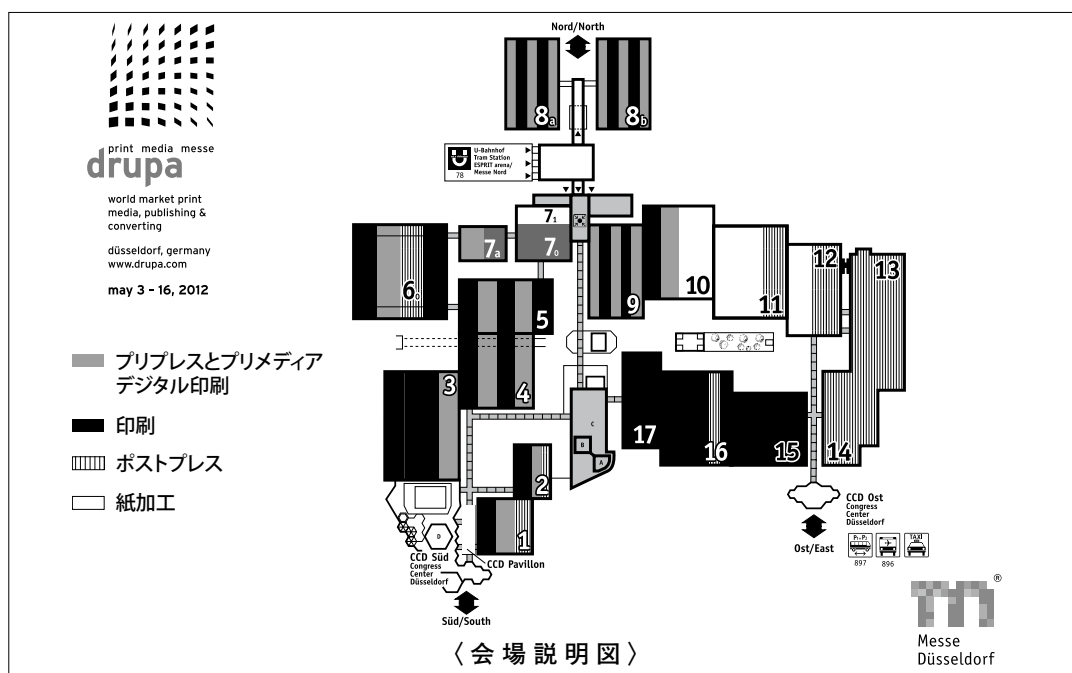
もう一つは「リーン生産」ではないだろう

か。部数減や経済的な背景から、新聞社側では新たな大型投資は難しい状況にあると考えられる。そしてメーカー側の業績も先ほどの例のように良くない。そうなるメーカーとしても、既存の設備に対する機能向上・効率アップ、さらなる自動化の方向に焦点を合わせてくる可能性がある。

また、昨今の新聞社を取り巻く環境問題への対応も重要だ。新聞社も例外ではなく、省エネやリサイクル、CO2排出削減など「持続可能性」への取り組みが求められている。

さらに、これらの分野以外にも、「デジタルと印刷の融合」といった全く新たな分野への技術の展開がないかどうかにも注目する必要があるだろう。

なお、WAN-IFRA Magazineでは今年の注目トレンドについて、次のようなキーワードをピックアップしている。「デジタル印刷」、「デジタルとオフセット印刷の統合」、「自動化」、「環境に責任を負う印刷」、「顧客志向」である。



新局長に就任して

普通の感覚忘れずに

神戸新聞社 情報技術局長

水内 眞

東日本大震災から間もなく1年という2月24日、友好紙の局長会議が河北新報社さんで開かれた。図らずもこの日は情報技術局長の人事発令日。局長としての初日に東日本大震災の被災地・仙台を訪れることになった。



会議では河北さんや新潟日報社さんの大震災当日の様子をうかがったほか、友好社の災害対応についても勉強させていただいた。これまで自分たちが考えていた以上に各社の「備え」に対する意識の高さが分かった。

阪神・淡路大震災から17年。お世話になった京都新聞社さんのこと、短期間でのシステムや紙面の復旧のこと…。単なる知識としてだけでなく、生きた教訓として継承できているのか、あらためて考えさせられた。

* * *

編集局整理部から現在の情報技術局に移って3年目に入った。整理部と接する機会の多い職場だったので顔見知りも多く、仕事の流れも徐々に理解してきたつもりだ。だが、カタカナや横文字の多さには今もなかなか慣れない。

インターネット検索画面の「お気に入り」にはIT用語辞書なるものを登録。意味不明の言葉が出てくると、こっそり検索している。

現在進行形でシステム更新作業をしている。この2年間はメーカー選定作業、メーカーが決まった後の要件定義などを行ってきた。作業は2013年秋まで続く。

このような中で、最初の「？」言葉が「ベン

ダー」(メーカーではだめなのだろうか)。さらに「RFI」、「RFP」などが続いた(日本語の方が分かりやすい)。ほかにも多くの「？」に遭遇したが、IT用語辞書のおかげで何とか乗り切ってきた。

ところが、である。

最近頭を悩ませている「CMS」という言葉は一筋縄ではいかない。

確かにIT用語辞書には、それなりの解説が書いてあるが、新聞社向けとは言い難い。

CMSが「コンテンツ・マネジメント・システム」の略であることは分かる。が、それは「素材管理システム」を横文字カタカナ表記にただけでは…。

頭の中で迷走が始まるのはこのあたりからだ。新聞だけでなくデジタル系にも素材を出せる機能があるということなのだろうが、現状では確立されたシステム・運用がないのが辛いところ。

社内報にシステム更新の話を書いた時にCMSの短い用語解説を付けた。

「コンテンツ・マネジメント・システムの略。記事や写真などの情報(素材)を収集、一元管理し、新聞だけでなく多媒体に発信・出力する仕組み。新聞製作を前提にした素材管理システムの発展した形とされる」

いかにも「らしい」言葉を並べたが、どこまで正しいかは分からない。

この言葉ほど「だれもが語れて、だれもが異論がある」ものも珍しい。社内、社外を含めて際限もなく同床異夢である。

* * *

話は脱線してしまったが…。大震災であらためて思ったことは、「仲間が困っていれば助ける」ということ。今の部署に来て思ったことは、専門用語を駆使するだけでなく分かりやすく伝えるということ。こんな普通の感覚でやっていけたらと思う。

歳万事楽

快晴の雪原を満喫

新潟日報社取締役印刷局長

徳永 伸一



9年前の長岡支社時代からクロスカントリースキーを復活させた。場所は国営越後丘陵公園。冬は駐車場と入園料が無料。スキー、ストック、専用靴も無料貸し出し、避寒施設も完備している。一周約1^キ程度の短いコースだが、公園の名前の通り里山に位置しているので、ちょっとした登り、結構な下り坂がある。年寄りのスキー遊びには丁度いい。

晴れた週末しか出かけない。年に1、2回の楽しみである。コースを2～3周歩いたり、走ったり、1周20分前後の行程だ。コーヒーを持参、途中の小高い丘で一服する。眼下に雪原。新潟の冬はいつも鉛色の空、滅多に青空は見られない。だから青と白のコントラストがすごくまぶしい。そして、広がる雪の風景から重苦しさは消える。雪は「きれい」だけの存在になってくれる。

調子に乗って少し走る。小走りの要領で手脚を前後させる。専門用語ではパスカング走法という。スキーの滑走面にギザギザがあり、スリッパはしない。いつも汗が出る前に胸が痛くなってしまう。敢闘精神は無いので休憩をためらわない。小高い丘には到達感が無い代わりに下りの楽しみがある。ストックを両脇に抱え、体を丸めてスピードを出す。中腰が辛くなると、腰を下ろす。滑り止めのお陰で恐怖感はない。「苦あれば楽あり」当たり前の摂理をうれしく感じる。

中学、高校とスキー部に所属していた。種目は「複合」競技。クロスカントリーとジャン

プの2種目で競う現在のコンバインドだ。競技人口の少ない競技、「全国大会への近道」と不純かつ現実的な動機だった。走るほうは県内ベスト10には入ったが、飛躍はブービー賞。結局、インターハイ、国体には届かなかった。

練習は厳しかった。嘔吐するほどしごかれた。楽しいのは合宿の食事くらいか。走りでは直径3^{センチ}程に成長したかかとの靴擦れに悩まされた。痛かった。まさに血が滲む練習だった。ジャンプでは転倒し脳震とうで病院に行ったこともある。つまり、スキーで楽しいことや晴れがましいことをあまり経験していない。

* * *

ところが、50歳を過ぎてカムバックしたクロカンには苦しさがない。日課としているウォーキング代わりになる。季節限定、雪寒地ならではの楽しみ、という動機も後押しした。

遠い昔の記憶をたどって「競技スキー」で「楽しかったこと」はないかをさがした。思いついた。高校2年の3月下旬、春合宿恒例でコーチやOBも参加する50^キ耐久レースでとてもいい気分になったことがある。いつもはクロカン専門の同僚に大きく離されるのだが、耐久レースではいい勝負ができた。疲れてくると自然に手足が動いた。苦しさは抜けていく。いまでいうランナースハイというやつだろう。

* * *

国営公園での楽しみもこれに似ているかもしれない。今年の冬は雪の日が続き、新潟市内の最大積雪深も70^{センチ}超。毎朝、家回りの除雪が日課となった。新聞輸送網は受託印刷の下準備が功を奏して「健全」だったが、雪が腰痛を倍にした。南魚沼市にある実家も4m近い積雪に痛めつけられ、今年限りで取り壊すことにした。雪にはどうしてもマイナスのイメージが付きまとう。だから、快晴のクロカンスキーは「雪国ハイ」を感じる貴重な時間になっている。

サイパン・フルマラソン挑戦

ミューラー・マルティニージャパン(株)
企画室 担当課長

古味 宏之



2012年の東京マラソンの抽選倍率は約9.6倍。28万人以上の応募があったようです。また、昨秋から大阪・神戸・京都マラソンと大型の市民マラソン大会が新しく開催され、どの大会も定員以上の応募があったと聞かれています。このように最近のランニングブームの加熱ぶりには驚くばかりです。

そんなランニングブームの中、私もブームにはまってしまった一人です。数年前から健康のためにと走り始めました。地元のマラソン大会でハーフマラソンに何度か挑戦するうち、走る楽しさに目覚めてしまい、今年の3月にフルマラソンに挑戦することになりました。

* * *

東京マラソンは魅力的な大会ですが、競争倍率が高すぎて選択外。何度か観光で訪れた事のあるサイパンでのマラソンを選択しました。私の他にも、東京マラソンや京都マラソンで抽選に外れたランナーがエントリーしていました。サイパンマラソンはホノルルマラソンほどメジャーな大会ではありません。参加人数も800名程度の大会ですが、吉本興業の間寛平さんが親善大使で参加されている為、年々参加者も増えてきているようです。

フルマラソンのコースは、島の中心部にあるアメリカンメモリアルパークをスタートして北上、ラストコマンドポスト手前で折返して南下、島の南側で再度折返しスタート地点に戻ってくるというコースです。ほぼ島の北から南まで走りきってしまうコース設定です。スタート時間は朝の4時30分のため、早めに起きて朝食。その後ウォーミングアップ

を兼ねながらスタート地点へ向かうと周辺は大勢のランナーで大混雑です。いかにも速そうなランナーや、タイムよりも楽しむ事を目的とした仮装ランナーなど、雰囲気は日本の大会とまったく同じです。間寛平さんの合図でランナーはいっせいにスタート。周りは暗い中、わずかな街灯を頼りに走り始めます。スタートから北の折り返し地点までは、だらだらと続く上り坂。後半に備えてオーバーペースにならない様ゆっくりと走りますが、折返した先頭ランナーとすれ違うといやでもペースが上がってしまいます。折返し地点を過ぎると後は下り坂。体も十分温まってきているのでペースアップを始めます。順調にペースアップし、スタート地点に戻ってきた頃には日が昇り始め、気温が上昇してきました。

* * *

本来なら景色を楽しめる道なのですが、そんな余裕はまったくありません。南の折返しを過ぎると残りは後10キロ位。気温の急上昇と強烈な日差しで体力を奪われ、練習で痛めていたひざの痛みが気になり始めます。また、この時期は強い北風が吹くためゴールまでの道のりは予想通り過酷なものとなりました。それでも沿道の応援からパワーをもらい、重い足を何とか運んでゴールへ向かいます。

ゴールが近づいてくると、沿道の応援も賑やかになり、不思議と足がまた動いてくれます。最後のコーナーを曲がりゴールゲートが見える時が感動の瞬間でした。最後の直線は感動に浸りながらゴール。目標タイムからは遅れてしまいましたが、フルマラソンを完走したという結果だけで十分満足できました。

夜はビーチで表彰式とライブが行われ、朝から夜までマラソンで楽しんだ一日となりました。

フルマラソンの完走は肉体的に辛いものがありましたが、終わってみると次への挑戦意欲が新たに湧いてきます。ランニング人口が増えていく理由が分った気がします。

顧客ニーズへの新たな挑戦

我が社は昨年おかげさまで創立60周年を迎えることが出来ました。新聞各社の皆様には長年にわたりご愛顧を賜り深く感謝申し上げます。

高度情報化社会と呼ばれる現代。それは高度な機能を持つ多数のハードとソフトによって支えられている社会です。そして、この社会に欠くことのできない技術の一つが光を使う加工技術です。この技術はあらゆる印刷分野、またエレクトロニクスを中心としたミクロの加工分野で利用され、現代社会に多大な貢献をしています。自社研究及び大学、他企業との共同研究によって常に新商品、新技術の開発に努めています。

このように弊社は印刷業界、エレクトロニクス業界などと密接な関係を保ちつつ、製品の提供を行いながらお客様のニーズを満たす感光性材料の応用技術の開発を続けてまいりました。

現在はインクジェット印刷方式の応用として、印刷用アルミ板上にUVインクジェットで画像形成して、印刷版とする開発も行っております。この特徴は現像液が不要なためCO2の削減が可能となります。現段階では描画スピードが遅いために実用段階には至っていませんが、装置及びUVインクの改良により実用可能と思われます。

今後もさまざまな技術開発を融合して、より良い製品の製造に取り組み、顧客ニーズへの新たな挑戦を続けてまいります。



ハイテクを光と分子で変える
富士薬品工業株式会社
FUJI CHEMICALS INDUSTRIAL CO., LTD

日本を救う省エネルギー！

「限りある資源」と言われる石油や石炭など化石燃料資源の「枯渇」問題にくわえ、東日本大震災をきっかけに自然災害対策が急務となり、更には、増税論議も活発になってきました。今や「省エネルギー」は経営にとって必要不可欠の大命題となっています。当社の母体である三菱重工業も、このような環境において大きく変貌を遂げつつあります。世界最大最高効率のJ形ガスタービンやCO2ヒートポンプ、リチウム二次電池、風力発電他、エコ指向装置の開発・製造・販売はもとより、低炭素モードの町造り（スマートコミュニティ）として、太陽・風力・地熱・水力など自然エネルギーを主体としたコミュニティ構成の提案を行うなど、次世代に向けての製品造りに大きく舵が取られています。さて、三菱重工

印刷紙工機械(株)は、印刷機械の専門メーカーとして立ち上げられましたが、設立からはや1年半が経ちました。多くの環境変化による試練の中で、三菱グループの統一テーマである「エネルギーの有効利用」に向け、当社としては、4×1輪転機DIAMOND SPIRIT、品質制御装置DIAMOND EYE等の省エネルギー型製品を投入して参りました。2002年に超高速輪転機DIAMONDSTARを市場に投入して約10年が経ちましたが、時代は大きく転換し、現在は、別刷り・委託印刷等小ロット高効率化への対応が求められております。又、同様にエコ・省エネ要求は、印刷資材にも及んでおり、資材関係も日々変化しています。当社はこのような環境変化の元で、資材メーカー様ともタイアップし、ユーザーの皆様のご期待に応えるべく、エコ・省エネ指向の製品作りを今後も探求して参ります。



MITSUBISHI HEAVY INDUSTRIES
PRINTING & PACKAGING MACHINERY, LTD.

人と地球にやさしく

我々NECグループは、C&C宣言40周年にあたる2017年に向けたビジョン—NECグループビジョン2017—として「人と地球にやさしい情報社会をイノベーションで実現するグローバルリーディングカンパニー」を掲げています。現在実行中の中期経営計画「V2012 - Beyond boundaries, Toward our Vision-」は、このビジョンの実現に向けたマイルストーンとして位置づけており、「C&Cクラウド戦略」を核としてその達成に全社を挙げて取り組んでいます。

こと新聞業界様におかれましては、本年は「JANPS2012」が開催される年であります。前回の「JANPS2009」では「ニュースメディアに新たな価値を」をテーマに、新聞社様の変革するビジネス環境に適応するための多様な

ソリューションをご提案させていただきました。

本年のテーマ・出展内容につきましては、現在、鋭意検討中でございます。多様化する新聞社様の事業環境やWEB・スマートフォンを中心とし日々変化・進化する情報社会環境、更に現在では避けては通れない、地球温暖化等の様々なエコ・環境問題などに対応して行く、新聞社様に少しでも貢献できる商品・ソリューションの展示・コンセプトのご紹介が出来ればと検討を進めております。

NECはこれからもお客様から愛される商品の提案・提供を通じて、社会及び新聞業界様に貢献してまいります。様々な取組みを継続することで、私達が目指します「NECグループビジョン2017」の実現に一步一步近づいていけるよう、これからも努力を重ねてまいります。

日本電気株

技術の進化でエコの深化を

長引く景気停滞や災害への不安が続く中、人々の「価値観」や「ライフスタイル」「エコに対する意識」などが大きく変わり、印刷業界にも、従来の枠にとらわれないダイナミックな変革が求められています。そんなニーズの変化を見据え、FFGSは、『i-Vision Wing』という新たなソリューションコンセプトを掲げ、「商印分野」だけでなく「パッケージ印刷」「データプリント」分野にも、サポート領域を拡大。一方、今後も「新聞製作分野」や「商印分野」の基盤となる「刷版」においては、品質の高さや刷りやすさの追求はもちろんのこと、究極的な環境負荷低減を目指し、一歩進んだ環境対応に取り組んでいます。その一つが、全国の刷版現場で急速に普及が進んでいる、CTP工程の現像廃液削減装置『XRシリー

ズ』です。すでに多くの新聞社様にご採用いただき、明確な廃液削減効果に対し高い評価をいただいています。そしてもう一つは、経済産業省が推進する「アルミニウムのProduct to Product」を具現化した「印刷用プレートのクローズドループリサイクルシステム『PLATE to PLATE』」です。これは、使用済みCTP版/PS版のアルミを、再びCTP版/PS版の原材料に利用することで大幅なCO2削減・省資源を実現する、画期的なりサイクルシステム。その意義に賛同し参画してくださる印刷会社様がどんどん増えてきています。こうした取り組みをさらに拡げ深めながらFFGSは、間もなく迎える創立10周年を次代への新たな起点に、これからも富士フイルムグループの総力を挙げて、新聞印刷分野をはじめ印刷業界全体の環境負荷低減に貢献してまいります。

FUJIFILM
富士フイルムグラフィックシステムズ株式会社

JANPS準備部会報告

より拓かれ、より活性化された実りある展示会を目指し、新たに策定された「四つの施策」の肉付け作業を準備部会が中心となって進めている。第7回準備部会はJANPS事務局の科学技術館の担当者も交えて3月16日(金)に開催した。「四つの施策」についての現状ならびに今後の課題、スケジュール等についてその後の経過を含め報告する。

1.新聞社の出展促進について

現在大手紙を中心に数社の新聞社から出展の意向を受けているが、同時に出展に関わる事項について説明をして欲しいとの要望も出されている。そこで新聞社の出展をさらに促すとともに、展示方法のノウハウ、出展までの作業フローなどを具体的に説明する「新聞社向けの出展説明会」を4月12日(木)に開催した。新聞社の出展に対して、これからも全面的に協力していく事を確認した。

2.研究レベルの先端技術の紹介

現在二つの研究室から出展するとの返事があった。出展の数をさらに増やすべく、IGASに出展した大学、専門学校を中心に出展を要請する。具体的には、大学研究室向けの「出展案内パンフレット」を作成し、春休み明けの4月中旬に送付した。場合によっては、訪問をしてJANPSへの出展を呼びかける。

3.海外からの来場者の積極誘致

英文の「JANPS勧誘チラシ」は、すでに昨春秋に作成し、10月にウイーンで開催されたIFRA展で配布した。今後は、3月に決定した「JANPSポスター」の図案を取り入れた「勧誘チラシ」を新たに作り、5月に開催されるdrupa展でも配布する。配布に際しては、drupaに出展するCONPT会員社にご協力をお願いし、各社ごとの社名を入れた「勧誘チラシ」を各社500部ずつ、それぞれのブースに置いて頂く事を計画している。

一方、IFRAが企画する「IFRA STUDY TOUR」は一昨年春、初めて日本で行われたが、今回はJANPS期間中の実施をIFRA側に強く働きかけ、11月24日(土)から11月29日(木)の日程にしてもらった。準備部会が選定、推薦した見学視察候補はJANPS展、河北新報社の本社・工場、日本製紙岩沼工場、東京機械のかずさテクノセンター、日経東雲工場、読売木場工場。

さらに「IFRA STUDY TOUR」とは別に、JANPSに来場した外国人向けの視察ツアーも必要に応じて実施する。「IFRA STUDY TOUR」に部分的に組み入れることが可能か今後検討する。

4.展示の多様化

展示の多様化の一環として、今回クラブ委員会から「JANPSホール内でのセミナーの開催」が提案された。テーマを含めたセミナーの持ち方など、クラブ委員会で更に検討する。

また広報委員会からは懇話会の活動を広くPRするために「CONPTブース(パネル展示)」を設けてはとの提案があり、今後広報委員会を中心にパネル製作などの具体的な検討を行う。

展示の多様化に関しては、出展社が確定してから、本格的な検討に入る。

*

従来、JANPSの準備は企画委員会が担当していたが、今回はクラブ委員会、広報委員会が加わりすべての委員会がそれぞれのテーマを持ってJANPSの準備に参画することになった。JANPS準備部会を核に、CONPTの総力を挙げてJANPSに取り組む体制が整ったと言える。

今回の準備部会は、出展締め切り後の5月22日(火)に開催し、「四つの施策」についてより掘り下げた検討を行う予定である。皆様の積極的な参加、ご協力も引き続きお願い致します。

(事務局)